

大井九条の会

大井九条の会
事務局連絡先
83-2358 二上

6月2日の定例会では

経済秘密保護法について学習し、8月の集いについて詳細を検討しました。

大井九条の会平和への思いを語る会

原爆朗読劇 夏の会 編 田村嘉浩 脚色

夏の雲は忘れない

ヒロシマ・ナガサキ1945年

I部 原爆朗読劇「夏の雲は忘れない」上演
II部 平和への思いを語る(参加者の皆さん)

日時: 2024年8月17日(土) 14:00~16:00

場所: 大井町生涯学習センター 第1・2会議室

参加費: 無料 定員50名

主催: 大井九条の会

連絡先 0465-83-5875 田村 0465-83-2358 二上

次回定例会

・7月7日(日) 14時~16時
・生涯学習センター第4会議室

二人の作曲家と平和への想い

二人の作曲家について、平和への想いを語ろう。音楽は為政者にプロパガンダで利用(悪用?)されることも多い。その好例がドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナーだ。ヒットラーやゲッペルスがワーグナーの勇壮な音楽に心酔し、ナチスの党大会や宣伝トーキー映画にもワーグナーの曲(マイスタージンガー、ワルキューレなど)が多く使用されていた。

オペラにかわる「楽劇」という新ジャンルを開拓したワーグナーの音楽は、映画にも度々登場。有名なのがコッポラ監督の「地獄の黙示録」だ。「ワルキューレの騎行」がテーマ曲に使われ、メロディを聴けば「ああこれか」と納得の超有名曲だ。

ヘリコプター師団による虐殺シーンでこの曲を使用。映画では「作戦の一環」としてヘリコプターから大音量で「ワルキューレの騎行」が流される。ベトナム戦争の現場がどれほど狂っていたのかを表現した名シーンだが、この曲が選ばれたのはちゃんと理由があった。

そもそも「ワルキューレ」は、戦士の亡骸を天馬に乗せて空を舞う9人姉妹のこと。戦場に現れる死神であり、コッポラ監督は容赦なく死者を増やしていく攻撃用ヘリをワルキューレの乗る天馬に見立て、20世紀の戦場における死神として描いているのだ。

だからといってワーグナーを狂気に結びつけたくはない。確かにワーグナーは反ユダヤ主義的傾向の強い音楽家ではあるが、ヒットラーとは一度も会っていないし、ナチスとは直接関与がない。ナチズムの台頭よりもはるか以前に死去しているからだ。イスラエルではワーグナーはタブーなようだが、

日本国憲法 第二章 戦争の放棄
第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
第二項 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

音楽に罪はなくワーグナーのドイツ精神がナチスドイツによって人種の優劣に置き換えられてしまったのは不幸な歴史だと思う。
ではナチ統治下において、演奏家たちはどう生きたのか。20世紀の大指揮者であるトスカニーニやワルターなど多くが国外に去るなか、フルトヴェングラーは国内に残りカラヤンはナチスに入党。このあたりはクラシック音楽史に詳しいのだが、興味深いのは著名なユダヤ系指揮者(米国人)レナード・バーンスタインの言葉だろう。「私はワーグナーが嫌いだ。だが、ワーグナーにひざまづきながら、彼を憎んでいる」と。ワーグナーの複雑な一面を感じさせられた。

◇
もう一人はロシアの作曲家、ドミトリ・ショスタコーヴィチだ。ショスタコーヴィチはスターリンの圧政の下をくぐりぬけた作曲家として知られている。大粛清の犠牲となった死者は800万〜1000万人とも推定される。そんななか反スターリン、反戦平和を貫きつづいかに当局に目をつけられないように苦心して、そこに自分の表現を盛り込むか……。鈴木淳史氏のコラム、「ショスタコーヴィチ・交響曲第5番 仮面を被った音楽」を参考に私の考えを述べてみよう。

この曲は「苦悩から闘争を経ての勝利」という、ベートーヴェンの「運命」に似た古典的な構成(スターリン好み)ながら、ただでは転ばないしたかさがあったのだ。例えば、第2楽章にこそソリビゼーの「カルメン」の引用が入っている。カルメンが「あたしの秘密は自分で守る、自分でちゃんと守るさ!」と歌う意味深い旋律や、大迫力の終楽章では国家の横暴を示唆するような、強制された歓喜など、暗号めいたメッセージを発見できるだろう。

なぜか日本では「革命」の愛称で親しまれ、ブラボーを叫んで立ち上がる人も多いショスタコ「第5番」だが、心静かに聴き解くべきだ。もう一曲、「第7番/レニングラード」は包囲網を生き抜く人々のリアルが描かれている。



林 正儀